

## 世親『無量寿経論』と道綽『安楽集』、迦才『浄土論』

辻本 俊郎

はじめに

一、道綽の見た『無量寿経論』

二、迦才の見た『無量寿経論』

三、『無量寿経論』と『論註』

結論

キーワード：道綽、迦才、『安楽集』、『浄土論』、  
『無量寿経論』『論註』

はじめに

工藤量導〔二〇一三〕はその著第一章において、道綽（五六二～六四五）『安楽集』と迦才『浄土論』の引用文献を整理している。道綽『安楽集』と迦才『浄土論』では筆者が研究課題としている Vasubandhu（世親、天親、西暦四〇〇～四八〇年）著・Bodhiruci（菩提流支）訳『無量寿経論』（『往生論』、『浄土論』などともいう）<sup>1</sup>の引用も見られるのであるが、工藤は「道綽は『往生論』の引用について、「天親浄土論」「天親菩薩論」「浄土論」などと断りながらも、基本的には曇鸞の『往生論』を混合して引証している。あるいは、道綽の手元にあったのは、単体としての『往生論』ではなく、曇鸞の註釈と合冊された状態で流布していたものであったという状況も考えられよう」とし、また、「迦才が『往生論註』を参照しえなかった可能性を指摘する」と述べ、これに関しては消極的な姿勢をみせている。

さらに「道綽が『往生論註』を引用する際には、

「天親浄土論」「天親菩薩論」「浄土論」と記し、曇鸞の著作から引用していることは明かしていない。迦才は『往生論註』を見ていない可能性もありうるから、その場合、世親『往生論』を指示する道綽の引文は増補の甚だしい取意文にしかみえず、参考するに値しないといふかきむことになってもおかしくないであろう。（中略）。したがって、迦才が『往生論註』をみていなかった」と推測している。

以上のことをまとめると、工藤の推測は次の2点である。

- ① 道綽の手元にあったのは、『無量寿経論』と曇鸞の論釈、すなわち、『論註』であったのではないか。
- ② 迦才が『論註』を参照しなかったのではないか。

筆者は、一九九五年以来、『無量寿経論』の書誌学的研究に携わってきた。本小論では、工藤の推測に対して道綽、迦才が実際に見たテキスト、すなわち『無量寿経論』であるのか、『論註』であるのか、について検討を加えたい。

### 一、道綽の見た『無量寿経論』

さて、『無量寿経論』テキストは大きく分けて次の3系統であることが判明している<sup>2</sup>。

- ① 宋元明版系統
- ② 高麗再雕版系統

<sup>1</sup> 『無量寿経論』の題名については辻本〔二〇一〇〕を参照されたい。

<sup>2</sup> 『無量寿経論』テキストの系統の詳細については辻本〔一九九九〕〔二〇〇四①〕を参照されたい。

### ③ 『論註』所引本系統

そして、後世の諸師が著した書物の中には『無量寿経論』が引用されているものが多く存在し、その引用文を精査することによって、彼らが参照した『無量寿経論』テキストが果たしてどのような系統に存していたものかを判断することができるのである。

道綽『安樂集』に『無量寿経論』が引用（『大正新脩大藏經』四七卷七上、八上、十九下）されている。これに関しては工藤が「道綽の手元にあったのは、『無量寿経論』と曇鸞の論釈、すなわち、『論註』であったのではないかと推測するまでもなく、すでに岸一英〔一九九九〕は道綽が『無量寿経論』としながらも『論註』の文を引用していることを指摘し、さらに、『論註』の引用は『安樂集』が最初であり、道綽は『論註』のみを見て『安樂集』に引用していることに注意しなければならないとしている。

また、柴田泰〔一九九七〕は、『安樂集』の引用は中国仏教では、教えが重要であり、題名を問題としなかったから『論註』の「註」を省いて本論と同じ『無量寿経論』と呼称されたとしている。

さて、ここで実際に道綽『安樂集』に引用された『無量寿経論』本文と高麗再雕版『無量寿経論』及び『論註』の文との字句の異同がある箇所を対比させ眺めて見よう。

(一) (『大正』四七卷一九頁下)

【安】 淨心菩薩即上地菩薩畢竟同得寂滅忍

【麗】 (相応文なし)

【註】 淨心菩薩与上地菩薩畢竟同得寂滅平等

(二) (『大正』四七卷八頁上)

【安】 是名遠離三種菩提門相違法

【麗】 是名遠離三種菩提門相違法故

【註】 是名遠離三種菩提門相違法

(三) (『大正』四七卷八頁上)

【安】 一者無染清淨心不為自身求諸樂故

【麗】 一者無染清淨心以不為自身求諸樂故

【註】 一者無染清淨心以不為自身樂諸樂故

この中で(一)の文は、『無量寿経論』本文ではなく、『論註』の文である。また、(二)の文は、『無量寿経論』本文であるが、『論註』所引本の『無量寿経論』を支持しているのである。(三)の文はどちらにも支持していない。このようなことから、字句は完全には一致しないものの、道綽は『安樂集』を著す際に手元に置いた『無量寿経論』テキストは、『無量寿経論』ではなく、曇鸞の『論註』であったことが分かるのである。

## 二、迦才の見た『無量寿経論』

迦才『浄土論』に引用された『無量寿経論』と高麗再雕版『無量寿経論』と『論註』との字句の異同が見られるのは、次の5か所である。

(一) (『大正』四七卷九四頁下)

【迦】 若善男子善女人修五念門行成就者畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏

【麗】 若善男子善女人修五念門成就者畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏

【註】 若善男子善女人修五念門行成就畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏

(二) (『大正』四七卷九四頁下)

【迦】 入第二門者以讚歎阿弥陀仏随順名義称如来名依如来光明智相修行故得入大会衆数

【麗】 入第二門者以讚歎阿弥陀仏随順名義称如来名依如来光明想修行故得入大会衆数

【註】 入第二門者以讚嘆阿弥陀仏随順名義称如来名依如来光明智相修行故得入大会衆数

(三) (『大正』四七卷九四頁下)

【迦】 出第五門者以大慈悲觀察一切苦惱衆生示応化身

【麗】 出第五門以大慈悲觀察一切苦惱衆生亦応化身

【註】 出第五門者以大慈悲觀察一切苦惱衆生

示応化身

(四) (『大正』四七卷九四頁下～九五頁上)

【迦】菩薩出第五門利益他迴向行成就応知

【麗】菩薩出第五門利益他迴向行成就応知

【註】菩薩出第五門迴向利益他行成就応知

(五) (『大正』四七卷九五頁上)

【迦】菩薩如是修五門行自利利他速成就阿耨多羅三藐三菩提故

【麗】菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故

【註】菩薩如是修五念門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故

以上のように(一)の文、(四)の文は高麗再雕版を支持し、(三)の文では『論註』を支持しているのである。また、(二)の文はどちらの特徴も有し、(五)の文では、どちらの特徴も支持していないのである。このことから迦才は『浄土論』を著す際に参照した『無量寿経論』テキストは、現存する『無量寿経論』テキストではなく、もちろん『論註』系統でもないことが明らかとなった。ただ言えることは、道綽は「天親菩薩論云」「天親論云」「天親浄土論云」「浄土論云」としながら、『論註』を引用していたのであるが、迦才『浄土論』については、そのようなことはない<sup>3</sup>。

### 三、『無量寿経論』と『論註』

さて、それでは『無量寿経論』がBodhiruci

(菩提流支)によって漢訳され<sup>4</sup>、流布したのち、道綽のように「無量寿経論云」などとしながらも『論註』を引用していた諸師はほかにもいたのだろうか。結論を先取りして言うと、筆者の研究〔二〇〇一〕、〔二〇〇二〕からすれば元暁『仏説阿弥陀経疏』、元暁偽撰『遊心安樂道』、延寿『宗鏡録』、智顗偽撰『浄土十疑論』の四書がその可能性があると考えられる。

筆者の研究〔一九九九〕によると、全体的に『無量寿経論』と『論註』に引用された『無量寿経論』とを比べてみると、後者には内容的に補足、あるいは整理された跡が見て取れるのである。また、それによって文意が異なる場合も少なからず見受けられるのである。「高麗再雕版」所収の『無量寿経論』と親鸞聖人加點本『無量寿経論註』に引用された『無量寿経論』本文を比すると、後者の方が、一八六字も字数が多く、わずかに三〇〇〇字足らずの『無量寿経論』という書物を考えると驚嘆に値すると言える。また、これは字数の問題のみならず、字句の異同も甚だしい。さらに言うならば、曇鸞は『無量寿経論』の内容を「願偈大意」、「起観生信」、「観察体相」、「浄入願心」、「善巧撰化」、「障菩提門」、「順菩提門」、「名義撰対」、「願事成就」、「利行満足」の十節に分けて、その内容を解釈したが、現存する『無量寿経論』テキストの大蔵経所収のもの、写本、石刻本、版本などいずれをとっても

<sup>3</sup> 残念なことに迦才『浄土論』には良質のテキストが伝わっていない(名畑〔一九五五〕、坂上・柴田・曾和・石川・工藤〔二〇〇三〕)。また、一般的には名畑〔一九五五〕において校訂されている慶安四年版を底本とするが、このほかにも京都常楽寺、稻菰山長福寺「七寺一切経」写本テキストが伝わっている(これらに関しては坂上〔一九九三〕、曾和〔二〇〇二〕〔二〇〇三〕〔二〇〇五〕を参照)が、これらも慶安四年版より原本に近いとは言えないようである(坂上・柴田・曾和・石川・工藤〔二〇〇三〕)。ただし迦才『浄土論』に引用されている『無量寿経論』を眺めてみるに、字句の異同はなかった。

<sup>4</sup> Bodhiruciによる漢訳年代については西暦五三一年説と

五二九年説がある。道宣(五九六～六六七)『統高僧伝』には『無量寿経論』に注釈を加えて『論註』を著した曇鸞は、陶隠居を訪ねて、その帰路、洛陽においてBodhiruciに出会い『観無量寿経』を授かったとある(大正五〇卷四七〇頁中)。その際に五二九年に漢訳した『無量寿経論』も授かったのではなかろうか。そうでなければ、曇鸞はBodhiruciと会う機会がないのである。その後、Bodhiruciは、五三一年に再び『無量寿経論』を漢訳しなおすのである。このように解釈すれば、『無量寿経論』と『論註』所引本『無量寿経論』テキストの字句の異同、字数の差異などが存する理由が氷解するのである。詳細については辻本〔二〇一一〕を参照されたい。

十節に分けるという形式で改行していないのである。

そこで、元暁（六一七～六八六）『仏説阿弥陀經疏』に引用された『無量寿經論』本文と高麗再雕版のものと『論註』と対比させてみよう。

(一) (大正三七卷三四九頁上)

【疏】 是莊嚴地功德成就

【麗】 莊嚴地

【註】 莊嚴地功德成就

(二) (大正三七卷三四九頁上)

【疏】 是莊嚴水功德成就

【麗】 莊嚴水

【註】 莊嚴水功德成就

(三) (大正三七卷三四九頁上)

【疏】 莊嚴妙色功德成就

【麗】 妙色功德成就

【註】 莊嚴妙色功德成就

(四) (大正三七卷三四九頁中)

【疏】 大乘善根男等無譏嫌名

【麗】 大乘善根界等無譏嫌名<sup>5</sup>

【註】 大乘善根界等無譏嫌名

(五) (大正三七卷三四九頁中)

【疏】 莊嚴虚空功德成就

【麗】 莊嚴虚空

【註】 莊嚴虚空功德成就

(六) (大正三七卷三四九頁上)

【疏】 莊嚴性功德成就者

【麗】 性功德成就者

【註】 莊嚴性功德成就者

(七) (大正三七卷三四九頁上)

【疏】 莊嚴清淨功德成就者

【麗】 清淨功德成就

【註】 莊嚴清淨功德成就

(八) (大正三七卷三四九頁下)

【疏】 莊嚴眷属功德成就者

【麗】 眷属功德成就

【註】 莊嚴眷属功德成就

(九) (大正三七卷三四九頁下)

【疏】 何者莊嚴大衆功德成就

【麗】 何者衆莊嚴

【註】 何者莊嚴大衆功德成就

(十) (大正三七卷三四九頁下)

【疏】 莊嚴上首功德成就

【麗】 上首莊嚴

【註】 莊嚴上首功德成就

以上のように(四)の文以外は、『論註』系統を支持しているのである。つまり、元暁は、『無量寿經論』そのものではなく、実際には『論註』所引本の『無量寿經論』テキストか、あるいは『論註』そのものを手元において参照していたのである。

次に元暁偽撰<sup>6</sup>『遊心安樂道』（八世紀以降）に引用された『無量寿經論』本文と高麗再雕版のものと『論註』に引用された『無量寿經論』と比べてみよう。

(一) (大正四七卷一一五頁中)

【遊】 若善男子善女人修五念門行成就

【麗】 若善男子善女人修五念門成就者

【註】 若善男子善女人修五念門行成就

(二) (大正四七卷一一五頁中)

【遊】 一者礼拝門。二者讃嘆門。三者作願門。

四者觀察門。五者迴向門。

【麗】 一者礼拝。二者讃歎。三者作願。四者觀察。

五者迴向。

【註】 一者礼拝門。二者讃嘆門。三者作願門。

<sup>5</sup> 高麗再雕版では、テキストの末尾に「大乘善根界 天台智者即界字乃男字錯。則宜改作。而諸疏家皆作界字。故存之」とある。すなわち、天台智者（智顗）は「大乘善根界」の「界」の字は、「男」の字の誤りとする。しかしながら、現存する智顗の書物には、「大乘善根男」という文句は確認できない。ただし、知礼（九六〇～

一〇二八）『観無量寿仏經疏妙宗鈔』には「大乘善根男」という文句が確認される。

<sup>6</sup> 『遊心安樂道』の著者について新羅撰述説、叡山僧撰述説、東大寺華嚴僧智愷撰述説などがある。辻本（二〇〇七）参照。

四者觀察門。五者迴向門。

(三) (大正四七卷一一五頁中)

【遊】云何讚嘆。口業讚嘆。

【麗】云何讚歎。口業讚歎。

【註】云何讚嘆。口業讚嘆。

(四) (大正四七卷一一五頁中)

【遊】三觀菩薩莊嚴功德

【麗】三者觀察彼諸菩薩功德莊嚴

【註】三者觀察彼諸菩薩莊嚴功德

(五) (大正四七卷一一五頁下)

【遊】不捨一切苦惱衆生心常作願迴向為首得成就大慈悲心故

【麗】不捨一切苦惱衆生心常作願迴向為首成就大慈悲心故

【註】不捨一切苦惱衆生心常作願迴向為首得成就大慈悲心故

ここに挙げた(一)～(五)のすべての文、つまりどの文を採ってみても『論註』所引本の『無量寿経論』を支持しているのである。このように『遊心安樂道』も元曉『仏説阿弥陀経疏』同様に『論註』から復元された『無量寿経論』か、あるいは『論註』を手元に置いて著されたことが明らかである。

さらに延寿(九〇四～九七五)『宗鏡録』に引用される『無量寿経論』も『論註』系統である。  
・天親云。広略相入者。諸仏有二種身。一法性法身。二方便法身。由法性法身故生方便法身。由方便法身故顯出法性法身。此二種身。異而不可分。一而不可同。是故広略相入。(大正四八卷五三五頁中)

ここでは、延寿は、「天親云」、すなわち、無量寿経論に言うとして、広略相入者云々と引用しているが、実はこのような文は『無量寿経論』にはない。それでは、どの書物にあるかと言うと、曇鸞『論註』に見られるのである。

そこで『論註』の相応文を挙げると、

・広略相入諸仏菩薩有二種法身。一者法性法

身。二者方便法身。由法性法身故生方便法身。由方便法身故顯出法性法身。異而不可分。一而不可分。是故広略相入。(真宗勸学寮〔一九二五〕下卷三九頁)

とある。多少の字句の異同はあるが、このことから、延寿も『無量寿経論』ではなくて、『論註』そのものを見ていた証左になろう。しかしながら、柴田泰〔一九九七〕は、『宗鏡録』に引用されている『無量寿経論』は、道綽『安樂集』の孫引きではないかと考えている。そこで、『宗鏡録』、『論註』、『安樂集』に引用されている『論(註)』を対比させてみよう。

【宗】広略相入者諸仏有二種身。一法性法身。二方便法身。由法性法身故生方便法身。由方便法身故顯出法性法身。此二種身。異而不可分。一而不可同。是故広略相入。

【註】広略相入諸仏菩薩有二。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身生方便法身。由方便法身出法性法身。此二法身。異而不可分。一而不可同。是故広略相入。

【安】広略相入者但諸仏菩薩有二種法身。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身故生方便法身。由方便法身故顯出法性法身。此二種法身。異而不可分。一而不可同。是故広略相入。

このように延寿『宗鏡録』に引用されている『論(註)』と道綽『安樂集』に引用されている『論(註)』は完全に一致しないので、孫引きの可能性は低いように思われる。と言っても柴田の見解も完全に否定できない。しかしながら、いずれにせよ、延寿は、『宗鏡録』を著すのに、「往生論云」と言いながらも実際には『論註』を引用しているのであるから、延寿は『無量寿経論』ではなく、『論註』を手元において参照したことは明らかなのである。

次に智顗偽撰『浄土十疑論』(八世紀後半)に引用されている『無量寿経論』を見てみよう。  
・故往生論云。(中略)一者無染清浄心。不為

自身求諸樂故。菩提は無染清淨處。若為自身樂。即染身心障菩提門。是故無染清淨心。是順菩提門。二者安清淨心。為拔衆生苦故。菩提是安穩一切衆生清淨處。若不作心拔一切衆生。令離生死苦。即違菩提門。是故安清淨心。是順菩提門。(大正四九卷八一頁上)

【麗】一者無染清淨心。不以為自身求諸樂故。二者安清淨心。以拔衆生苦故。三者樂清淨心。以令一切衆生得大菩提故。

【註】一者無染清淨心。以不為自身求諸樂故。菩提は無染清淨處。若為身樂。即違菩提是故無染清淨心。是順菩提門。二者安清淨心。以拔衆生苦故。菩提是安穩一切衆生清淨處。若不作心拔一切衆生。離生死苦。即便違菩提是故拔一切衆生苦。是順菩提門。(真宗勸学寮〔一九二五〕下卷四四頁)

以上のように、『浄土十疑論』では、「往生論云」、すなわち『無量寿経論』に云う、と記しておきながら、実際には『無量寿経論』のみならず、『論註』の文も引用しているのである。つまり、『浄土十疑論』の作者は、『無量寿経論』ではなく、『論註』を手にして著したということになる。

## 結論

以上、小論で検討してきたことをまとめると、次の4点が指摘できる。

- ① 道綽は『無量寿経論』ではなく『論註』を手元に置いて『安樂集』を著したことが明らかになった。したがって、工藤の推測の正しいことが証明できたのである。
- ② 迦才が参照した『無量寿経論』テキストは、現存する『無量寿経論』テキストではない可能性が高く、しかしながら、少なくとも『論註』系統ではないことは明らかになった。すなわち、この点も工藤の推測が正しいことが証明された訳である。
- ③ 道綽『安樂集』と同様に『無量寿経論』で

はなく、『論註』そのものを参照して著されたのは、延寿『宗鏡録』、智顗偽撰『浄土十疑論』の二書である。

- ④ 元暁『阿弥陀経疏』、元暁偽撰『遊心安樂道』の二書は、『論註』の文は見当たらないため、もちろん『論註』そのものを引用した可能性もあるのではあるが、『論註』所引本『無量寿経論』を引用した可能性もある。

## (参考文献)

- 大須賀秀道〔一九二七〕「浄土論の訳本に就いて」大谷大学『仏教研究』第8巻第4号  
岸一英〔一九九九〕『『無量寿経論』校異の意義』『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所  
工藤量導〔二〇一三〕『迦才『浄土論』と中国仏教一凡夫化土往生説の思想形成』法蔵館  
坂上雅翁〔一九九三〕「七寺所蔵迦才『浄土論』について」『印度学仏教学研究』第41巻第2号  
坂上雅翁・柴田泰山・曾和義宏・石川琢道・工藤量導〔二〇〇三〕「迦才『浄土論』の書誌学的研究」『佛教文化研究』第50号  
柴田泰〔一九九六〕「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(一)」『印度哲学仏教学』第11号  
柴田泰〔一九九七〕「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名(二)」『印度哲学仏教学』第12号  
「浄土教の総合的研究」研究班編〔一九九九〕『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所  
真宗勸学寮〔一九二五〕『浄土論註校異』真宗勸学寮  
真宗教学研究所〔一九七二〕『浄土論註総索引』東本願寺出版部  
曾和義宏〔二〇〇二〕「常楽寺所蔵迦才『浄土論』について―上巻の翻刻と解説―」『浄土宗学研究』第28巻  
曾和義宏〔二〇〇三〕「翻刻・常楽寺所蔵迦才『浄土論』中巻」『浄土宗学研究』第29巻  
曾和義宏〔二〇〇五〕「翻刻・常楽寺所蔵迦才『浄土論』下巻」『浄土宗学研究』第31巻  
高瀬承厳〔一九一七〕「類本往生論に就きて」『仏書研究』第29号  
辻本俊郎〔一九九九〕「『無量寿経論』テキスト考」『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所  
辻本俊郎〔二〇〇〇〕「『無量寿経論』テキストの検討」『仏教学会紀要』第8号  
辻本俊郎〔二〇〇一〕「天台系論書に引用される『無量寿経論』について」『アジア文化学科年報』第4号  
辻本俊郎〔二〇〇二〕「華嚴系論書に引用される『無量寿経論』について」『仏教学会紀要』第10号  
辻本俊郎〔二〇〇四①〕「『無量寿経論』テキスト考(そ

の2) - 明版・清版を中心として」『アジア文化学科年報』第7号

辻本俊郎〔二〇〇四②〕「『無量寿経論』の流伝」『印度学仏教学研究』第52巻1号

辻本俊郎〔二〇〇六〕「『無量寿経論』の諸本について」『アジア文化学科年報』第9号

辻本俊郎〔二〇〇七〕「『遊心安楽道』の著者について - 『無量寿経論』を手がかりとして - 」『アジア学科年報』

第1号

辻本俊郎〔二〇一〇〕「世親『無量寿経論』の題名をめぐって」大阪経済法科大学『東アジア研究』第54号

辻本俊郎〔二〇一一①〕『『無量寿経論』諸本対照』私家版

辻本俊郎〔二〇一一②〕「『無量寿経論』とBodhiruci」『アジア学科年報』第4号

名畑応順〔一九五五〕『迦才浄土論の研究』法蔵館